

# 障害者バドミントン第3回アジア選手権 (2012年) に参加して

—日本選手団総合コーチとして—

Participation in the 3<sup>rd</sup> Asian Championship in Badminton for people with Disabilities as a  
Japanteam head coach

金 子 元 彦 (東洋大学ライフデザイン学部)  
KANeko Motohiko\*

## 【要旨】

「2012年障害者バドミントン第3回アジア選手権大会」に日本障害者バドミントン協会日本選手団総合コーチとして遠征する機会を得た。今後の当該領域の発展のためにも、その経験を通じて学んだことを記録しておく必要があるのではないかと考えた。あくまでも私見としての記録と位置づけられるが、今後の日本障害者バドミンントンの発展や、障害者スポーツの発展を願いながら、以下の問題提起をしたい。

1. 比較的各国で層の厚い男子種目では優勝者を出せなかったことや、特に敗れた試合内容などから考えると、そこには大きな壁や課題があった。特に、上肢障害のクラスや、下肢障害の比較的軽度のクラス (SL4) などは相当にレベルの高い試合が展開されていることから、その対策の一環として、他の競技団体が取り組んでいるように、いわゆる健常者でトップクラスの選手や、そのコーチらを招聘した合宿等を取り入れることも必要となるだろう。
2. 障害者バドミントンの場合には、少なく見積もっても3種類の障害や試合形式に精通している必要があることや、同一クラスの選手であっても、原疾患の違いがあったり、受傷時期が違うことなどから、それらに対応するコーチはどんな局面であっても、多様性に対していかに寛容でいられるか、という態度が求められるであろう。
3. 今後、日本選手団を組んで遠征する国際大会派遣に際しては、原則として、選手団全体として英語力の担保 (英語通訳の雇用等) を必要とするであろう。同時に、関係するスタッフや選手においても、日ごろから英語を中心とした語学力を向上させるための姿勢を持ち合わせる必要があるであろう。

キーワード：コーチに求められるもの、障害者バドミンントンの強化。

---

\*Toyo University, Faculty of Human Life Design

住所：〒351-8510 朝霞市岡48-1 (東洋大学)

電話・ファックス：048-468-6371 (研究室直通)

E-mail：mkaneko@toyo.jp

## I. はじめに

筆者は2012年10月29日から2012年11月4日まで行われた、「2012年障害者バドミントン第3回アジア選手権大会」に日本障害者バドミントン協会日本選手団総合コーチとして、遠征する機会を得た。筆者にとっては、2011年に中米グアテマラで開催された障害者バドミントン世界選手権大会について国際大会派遣の機会を得たこととなる。ついで、今後の当該領域の発展のためにも、その経験を通じて学んだことを記録しておく必要があるのではないかと考えるところである。日本障害者バドミントン協会における強化部門の活動に関わることになって日の浅い筆者であるが、協会内にはこれまでの活動に伴う記録や問題提起等が、必ずしも十分に残されてきていない状況があるようにも感じていた。こうした背景もあって、今後の当該領域における諸活動に結びつけられるような記録を残しておきたいと考えたことから、本稿を執筆している次第である。具体的には「2012年障害者バドミントン第3回アジア選手権大会」に、日本選手団総合コーチとして参加したことを通じて直面したことや感じたこと、あるいは、今後の課題として解決しなければならないこと等の記録となる。本稿を通じた問題提起や感想については、日本障害者バドミントン協会として統一的な合意が得られているわけではない。現在、日本障害者バドミントン協会としての大会総括が進められている最中であるが、本稿については、あくまでも私見としてペーパーと位置づけられることをお断りしておきたい。こうした限界を引き受けつつも、今後の日本障害者バドミントンの発展や、障害者スポーツの発展を願いながら、執筆したいと考えている。また、本編の一部には、2011年度に行われた世界選手権（グアテマラ）における経験等についても、必要に応じて触れることとなった。

## II. 2012年 障害者バドミントン第3回アジア選手権の概要

### 1. 参加国数および、日本選手団

障害者バドミントン第3回アジア選手権は韓国 ヨジュにおいて、世界バドミントン連盟によって公認された障害者バドミントンの大陸別大会の一つという位置づけで開催された。本大会の主催は韓国障害者バドミントン協会であった。参加は日本を含む14カ国であった。有力国の中では中国<sup>1)</sup> および、インドネシアが不参加であった。日本選手団は2012年度の日本障害者バドミントン協会強化指定選手のうち、選手21名（男子立位12名、男子車椅子3名、女子立位2名、女子車椅子4名）および、スタッフ12名（団長兼監督1名、総合コーチ1名、立位担当コーチ2名、車椅子担当コーチ2名、クラス分け等メディカル担当2名、総務1名、韓国および中国語通訳1名、ヒッティングパートナー2名）によって構成された。

### 2. クラス分けの概要

競技については障害および、身体的機能の状態別にクラス分けされて、およそ同程度の身体的状態と見なされる選手同士が競い合うよう配慮される。立位において上肢障害のクラスおよび、下肢障害2クラスに分けられる。車椅子についても2クラスに分けられ、ほかに低身長<sup>2)</sup>のクラスがある。

### 3. 大会参加までの準備－強化合宿の開催－

2012年度における日本障害者バドミントン協会強化部門の活動については、必ずしも円滑に進まなかった面があった。しかし、5月に強化指定選手が選考されて以降、強化指定選手を対象とした強化合宿を2012年7月7日～2012年7月8日の2日間および、2012年9月29日～2012年9月30日の2日間にわたる計2回実施した。

強化合宿について、当日は強い負荷を課したトレーニングではあるが、あくまでも一過性のものであるという認識のもとに、各選手には強化合宿を契機として日ごろのトレーニングに新たな視点を持ち込むことや、新たなトレーニング方法を持ち込むことなどを働きかけていくことをテーマとすることを強化スタッフ間で確認し合って臨んだ。いわゆる基礎体力トレーニングに類する内容については、できるかぎり立位と車椅子選手が合同で行えるように配慮し、直接的にバドミントンに關係する内容については、立位および、車椅子を別で展開した。

### 4. 日程および、出来事

#### (1) 2012年10月29日：現地入り

前日まで開催されていた障害者バドミントン日本選手権（長崎）を経てそのままの遠征となったため、選手団は福岡空港から仁川空港への移動となった。現地での宿泊が韓国障害者スポーツセンターであったため、仁川空港から約90分のバスによる移動があった。この移動に際しては、障害者スポーツ（バドミントン）の大会の場合、主催者によってリフト付きのバスが準備され、車椅子選手らへの対応をする。

#### (2) 2012年10月30日：クラス分けおよび、公式トレーニング

前日に発表されたクラス分けおよび、公式トレーニングのスケジュールにしたがって行動した。クラス分けについては、午前中の時間帯に割り当てられた。前年度の世界選手権に出場し、すでに国際クラスの確定している選手については、そのテストを受ける必要がなかった。また、公式トレーニングについては、16時30分～18時30分の2時間が与えられた。

#### (3) 2012年10月31日：クラス分け、公式トレーニング、監督会議および、レセプション

体調不良のために前日のクラス分けテストを受けられなかった1名の選手が、クラス分けテストを受けた。公式トレーニングについては、10時30分～12時00分までの90分であった。

監督会議においては大会技術委員を中心として進められ、主に翌日からはじまる本大会の組み合わせを決定するための調整や確認が行われる。たとえば、自国選手のエントリーの漏れがないかどうか、自国選手の所属クラスに誤りがないか等を確認し合う。その上で、先行する大会で得られたポイント等を使ったある基準に従って、各クラスのシード選手が適切であるかどうかの確認が取られる。本大会においては、開幕時点での各クラスの世界ランキング上位者からシードされた。シード外の選手については、予選リーグで同国対戦にならないことなどの配慮がなされたうえで、コンピューターソフトを用いた抽選が行われる。この抽選は監督会議中に完全公開で行われた。

競技開始前日に組み合わせを決定するというのは、障害者バドミントン（障害者スポーツ）の一つの特徴といえるだろう。これは参加選手全員の所属クラスが、クラス分けテストを経て最終決定されるのが、このタイミングにまでずれこむことが関係している。どのクラスに何人の選手がエントリー

しているかが最終的に確定するのに、ここまでの時間を要するのである。

この会議の進行については、開催地域を問わずに英語で行われるため、各国の監督会議出席者には相応の英語力が求められる。本大会の日本選手団の場合、韓国および中国語通訳を帯同したため、英語による進行に応じながら、通訳を通して韓国チームから情報を得ることなども行い、情報の整理を進めた。

(4) 2012年11月1日～2012年11月3日：競技の進行、表彰式（最終日）および、ドーピングコントロール

各クラスともに予選リーグから順次、競技が開始された。予選リーグでは有力選手が分散するために、あらゆるスポーツ大会同様に選手間の実力差がある中で試合が進行するケースが圧倒的に多い。しかし、予選リーグを経て決勝トーナメントへと進むと、各クラスともにその試合内容は一気にレベルを上げた。

表彰式については、障害者スポーツを特徴づける「クラス分け」があるため、各クラスごとに優勝者から入賞者までを決定する。このため、多くの場合、このセレモニーは長時間におよぶ。

ドーピングコントロールについては、大会要項の中で実施する旨の記載があったことから、日本選手団としてある程度、それに対する心構えを持つよう促していたが、徹底しきれなかった。これまでも各種国際大会開催に際してはドーピングコントロール実施の記載があったが、実際に行われたケースがなかった。このことが影響して、準備がやや軽率になった感は否めない。しかし、現地においては日本選手団の男子選手1名および、女子選手1名が検査の対象として指名され、当該選手の混乱や過度な緊張を招いた。こうした事態を招いたことに対しては、選手団、特にスタッフについては猛省を必要とするところであり、今後の取り組みに反映させるべき課題といえる。

(5) 2012年11月4日：帰国

実質的には仁川空港で解散となり、各自の最寄の空港へと帰国した。

### III. 日本選手団の成績

各クラス3位以上となったメダル獲得総数は13個であり、金メダル2個、銀メダル3個および、銅メダル8個であった。詳しい内訳は、次のとおりであった。

優勝：女子シングルス（SL4/SU5混合）、女子ダブルス（SU5）

準優勝：女子シングルス（SL4/SU5混合）、男子ダブルス（SL3）、混合ダブルス（SU5）

第3位：男子シングルス（SU5）、男子シングルス（SU5）、男子シングルス（SL3）、女子シングルス（WH2）、男子ダブルス（SU5）、男子ダブルス（WH1）、混合ダブルス（SU5）、混合ダブルス（WH2）

なお、記号の意味はおよそ次のようなもので、各クラスを表すものである。SUとは立位上肢障害クラス、SLは女子下肢障害クラス、WHは車椅子クラスを意味する。各クラスを示すアルファベットのあとについている数字については、大きい数字ほど障害の程度が軽いことを意味する。立位下肢障害クラスにおけるSL4ではバドミントンの国際ルールにしたがった試合を行うが、SL3についてはコート横方向を正式ルールの半分に狭めた、いわゆる半面シングルスともいわれる方法が採用されている。なお、ダブルスについては、異なるクラスの選手同士でペアを組むことも可能であるが、その

場合には、軽い選手のクラスで出場することとなる。

#### IV. 大会を振り返って—私見としての総括と課題—

「2012年障害者バドミントン第3回アジア選手権大会」に総合コーチとして参加をしたことを振り返りながら、あくまでも私見ではあるが、現時点における総括と課題の提案をしてみたい。

##### 1. 日本選手団の成績と、これからの強化への提案

女子種目については総じて好成績であったといえるが、もう一方でエントリー数そのものが非常に少ないことを指摘しておく必要があるだろう。男子種目および、混合種目については第3位以上に入賞した数が比較的多かったことから、一定の評価を与えることができるだろう。しかし、出場選手がアジア圏に限定される今大会においてすらも、比較的各国で層の厚い男子種目では優勝者を出せなかったことや、特に敗れた試合内容などから考えると、そこには大きな壁や課題があったことを、選手自身も、強化スタッフも強く自覚する必要がある。特に、上肢障害のクラスや、下肢障害の比較的軽度のクラス（SL4）などは相当にレベルの高い試合が展開されていることから、その対策の一環として、他の競技団体が取り組んでいるように、いわゆる健常者でトップクラスの選手や、そのコーチらを招聘した合宿等を取り入れることも必要となるだろう。

##### 2. 障害者バドミントンのコーチに求められるもの

筆者は2012年 障害者バドミントン第3回アジア選手権に総合コーチという立場で参加をした。「総合」の意味するところについては、立位選手および、車椅子選手のどちらかに特化することなく全体に目配りをしながら、かつ、立位および、車椅子担当の各コーチ陣の調整役を果たすことと理解して、この大会までの準備期間ならびに、大会期間中を過ごした。

実際の活動としては、さまざまな事情から立位選手と接する機会のほうが圧倒的に多くなった。ここで、障害者バドミントンの種目等について考えてみると、立位についても上肢障害と下肢障害の選手がおり、さらに、車椅子の選手がいる。そして、実質的には障害による分類の数だけ、異なるルールの試合形式が存在する。こうしたことから考えてみると、コーチは少なく見積もっても、3種類の障害や試合形式に精通している必要がある。また、同一クラスの選手であっても、原疾患の違いがあったり、受傷時期が違ったりして、まさに多種多様に対応することが求められる。場合によっては、現疾患や受傷時期の違いなどは、その選手の内面にも少なくない影響を与えていることがあることから、コーチはどんな局面であっても、彼らの多様性に対していかに寛容でいられるか、という態度が求められるといえよう。

次に、いかにして選手の動きや動きの感じに同調できるかという運動共感<sup>3)</sup>の問題を考えてみたい。このことを考えてみたい背景は、筆者の場合、上肢障害選手および、車椅子選手のプレイをコート後方のコーチングボックスから観察している際には、筆者の身体が同時に動くような場面に出合う。しかし、下肢障害選手の、特にコート後方への動きについて、そのような実感を得たことがほとんどない。日本選手団における下肢障害選手は、そのほとんどが義足であることから、筆者らのこれ

までの運動経験では想像しきれないような運動中の「感じ」があるのかもしれない。とはいえ、身体的な動きに関するコーチングをしていこうとした場合には、当該選手の運動中の「感じ」に同調できること、潜り込めることがきわめて重要となる。義足等による下肢障害選手の運動感覚について、その理論的背景を探求しながら、実践の場面を通じて、彼らの持つ運動中の「感じ」を捉えていきたい。

### 3. 国際大会派遣に伴う語学力（英語力）の担保

本編の中にも記したが、障害者バドミントンの国際大会では、大会期間に入ってから行われる監督会議を通じて、各クラスの組み合わせ等が決定されていく。その会議では大会主催者と各国スタッフとの間でさまざまな事項について確認や、合意がなされていく。その意味で、監督会議はきわめて大切な場であり、各国のスタッフにはこの席上で迅速かつ、適切な判断を求められることも多く、また、場合によっては、異議を唱え、適切な状態に落ち着くよう交渉することも必要となる。

今大会における日本選手団の場合、韓国開催であるという事情を考慮して、韓国語と中国語に精通している通訳を雇用し、大会前からの情報収集や、現地における交渉等を進めた。その甲斐あって、大会運営本部からの情報収集も適確になされ、準備期間から大会期間まで比較的安定的に選手団の運営がなされていたと考えられる。しかし、今大会はあくまでもアジア圏の大会であったことから、このような備えで対応できたという側面があることも忘れてはならない。今後については、日本選手団を組んで遠征する国際大会派遣に際しては、原則として、選手団全体として英語力の担保（英語通訳の雇用等）を必要とするであろう。同時に、関係するスタッフや選手においても、日ごろから英語を中心とした語学力を向上させるための姿勢を持ち合わせる必要があるであろう。

## V. まとめ

2012年10月29日から2012年11月4日まで行われた、「2012年障害者バドミントン第3回アジア選手権大会」に日本障害者バドミントン協会日本選手団総合コーチとして、遠征する機会を得た。今後の当該領域の発展のためにも、その経験を通じて学んだことを記録しておく必要があるのではないかと考えた。あくまでも私見としてのペーパーと位置づけられるが、今後の日本障害者バドミントンの発展や、障害者スポーツの発展を願いながら、以下の問題提起をしたい。

1. 比較的各国で層の厚い男子種目では優勝者を出せなかったことや、特に敗れた試合内容などから考えると、そこには大きな壁や課題があった。特に、上肢障害のクラスや、下肢障害の比較的軽度のクラス（SL4）などは相当にレベルの高い試合が展開されていることから、その対策の一環として、他の競技団体が取り組んでいるように、いわゆる健常者でトップクラスの選手や、そのコーチらを招聘した合宿等を取り入れることも必要となるだろう。

2. 障害者バドミントンの場合には、少なく見積もっても3種類の障害や試合形式に精通している必要があることや、同一クラスの選手であっても、原疾患の違いがあったり、受傷時期が違うことなどから、コーチはどんな局面であっても、彼らの多様性に対していかに寛容でいられるか、という態度が求められるであろう。

3. 今後、日本選手団を組んで遠征する国際大会派遣に際しては、原則として、選手団全体として英

語力の担保（英語通訳の雇用等）を必要とするであろう。同時に、関係するスタッフや選手においても、日ごろから英語を中心とした語学力を向上させるための姿勢を持ち合わせる必要があるであろう。

**[注および、引用・参考文献]**

- 1) 中国はアジア圏における最有力国ともいわれているが、これまでのところ、障害者バドミントンにおけるアジア圏最高峰の大会とされるアジア・パラリンピック（通称 アジパラ）にしか出場しないとされている。
- 2) 現行の日本バドミントン協会強化指定選手の中に、このクラスに該当する選手はいない。
- 3) 金子明友・朝岡正雄編著、運動学講義、p257（1990）。

## Participation in the 3<sup>rd</sup> Asian Championship in Badminton for people with Disabilities as a Japan team head coach

KANEKO Motohiko

### **【abstract】**

Since I had opportunity to go on an expedition to the 3<sup>rd</sup> Asian championship in Badminton for people with Disabilities in 2012 as a Japan team synthesis coach in the Badminton Associate of a Japanese Disabled Person, I thought that it would be necessary to record what was learned through this experience for development of the domain concerned in the future.

A though I regard this as a record of my personal opinion to the last, wishing for the development of the Japanese Disabled Person Badminton in the future and of sports for the disabled. I would like to carry out the following problem.

1. When we thought that a champion was not able to be selected comparatively in a thick-layered boy team in each country and the content of a beaten game, we had a big wall and subject to deal with. Since a fairly high-level game is being developed especially in the class for upper-limb obstacle and the comparative by minor class(SL4) of leg obstacle, it will be also necessary to take in top-class players among the so-called healthy persons and the training camp as well as invited coaches and others such as from other sports associations to take a part in the measures.
2. In the case of Disabled Person Badminton, a coach needs to be well versed in three kinds of obstacle and game form at the least. Also a coach will be asked if he can bear his tolerance in any time as there is a difference in a primary disease or time taken a wound is difference even player of same class.
3. On the occasion of the International Convention Dispatch which constructs a Japanese team with ability and goes on an expedition, a person who had the English ability is basically needed as the whole team from now on. At the same time, in the related staffs and players, it will be necessary to have the posture for raising English ability from every life.

---

原稿受領2012年10月31日